北翔大学短期大学部研究紀要　第58号　　令和２年３月
Bulletin of Hokusho College No.58　　March, 2020

日本国の財務書類の貸借対照表分析
――『法人企業統計』との比較を通して――

A Balance Sheet Analysis of National Government in Japan
―― Comparison to “Financial Statements Statistics of Corporations by Industry” ――

湯　澤　直　樹*
Naoki　YUZAWA

は　じ　め　に

「会計とは、企業、家庭、公益法人、組合、地方自治体、国等の経済主体が、経済的情報を測定し、伝達することをいう。」そして、「それぞれの経済主体ごとに会計が存在する」のである[1)]。そうした会計を分析する上での基本的な資料として、個々の企業は『有価証券報告書』が、様々な業種・規模の企業は『法人企業統計』が、日本国は『国の財務書類』が挙げられる。

「法人企業統計調査は、統計法に基づく基幹統計調査として『法人企業統計調査規則』（昭和45年大蔵省令第48号）に基づいて行うもので、その目的は、我が国における法人の企業活動の実態を明らかにし、あわせて法人を対象とする各種統計調査のための基礎となる法人名簿を整備することで」、「営利法人等を対象とする標本調査で」ある[2)]。「営利企業を対象とする会計を企業会計とい」[3)]うのであるから、『法人企業統計』は企業会計の分析にとって必要な資料といえる。

「政府部門の財政状態を定期的に把握し、財政の健全化、行政の効率化のために採るべき政策判断に有用な情報を提供する」[4)]のが公会計である。企業会計を分析する基礎的な資料としてあげた『有価証券報告書』や『法人企業統計』と並ぶ、公会計の主体としての日本国政府が公表している基礎的な資料に、『国の財務書類』がある。

『国の財務書類』は、「企業会計における貸借対照表の手法を用いて提供することとし、平成12年10月に『国の貸借対照表（試案）』（平成10年度決算分）を作成・公表し」、「平成10年度決算分より、一般会計及び特別会計を合わせた国全体のストック情報を開示。平成12年度決算分からは、特殊法人等も含めた連結貸借対照表も併せて公表してい」る[5)]。「この『国の貸借対照表（試案）』は、その後、平成14年度決算分まで作成され」、「平成15年６月、財政制度等審議会において『公会計に関する基本的考え方』が取りまとめられ」、「平成16年６月に『省庁別財務書類の作成基準』が取りまとめられ」、「平成15年度決算分より、財務省主計局において、省庁別財務書類の計数を基礎として、国全体のフローとストックの情報を開示する『国の財務

＊北翔大学短期大学部ライフデザイン学科

書類』の作成・公表を行ってい」る[6]。

「『国の財務書類』の体系は、

① 会計年度末における資産及び負債の状況を明らかにする『貸借対照表』

② 業務実施に伴い発生した費用を明らかにする『業務費用計算書』

③ 貸借対照表の資産・負債差額の増減の状況を明らかにする『資産・負債差額増減計算書』

④ 財政資金の流れを区分別に明らかにする『区分別収支計算書』

の財務書類４表及びこれらに関連する事項の附属明細書となってい」[7]る。

これら「財務書類４表のうち、『貸借対照表』と『区分別収支計算書』については、企業会計とほぼ同様の形態であるということができ」る「が、『業務費用計算書』と『資産・負債差額増減計算書』は、国の特性を踏まえた独自のもので」ある。「国の財政活動は、強制的に徴収された税収等を財源としてこれを配分し執行しており、利益獲得を目的としていないことから、国においては、企業会計のような損益計算書の作成は行わないこととしてい」る[8]。

「国の業務と関連する事務・事業を行っている独立行政法人等を連結した『省庁別連結財務書類』も作成してい」る。「独立行政法人等は、基本的には国の行政活動のうち実施機能を分離して別法人の形態で活動している主体であることから、国の業務と関連する事務・事業を行っている独立行政法人等を各省庁に連結することにより、国が実施している業務の全体像を捉えることが可能となり」[9]、「連結財務書類の作成目的に鑑みて、国の業務と関連する事務・事業を行っている法人を連結対象としてい」て、「この国との『業務関連性』により連結する独立行政法人等は、『国（各省庁）が監督権限を有し、国（各省庁）から財政支出を受けている法人』とし、監督権限の有無及び財政支出の有無によって業務関連性を判断することとしてい」る。「ただし、各省庁の監督権限が限定されている場合や、財政支出がない場合等には、業務関連性が弱く、連結を行うことにより一体として説明責任を果たす必要性は低いと考えられることから、連結対象からは除外してい」るため[10]、平成29年度は202法人が連結対象法人となっている。しかし、「日本銀行については、省庁の監督権限が限定されているうえ、政府出資はあるもののその額は僅少であり、補助金等も一切支出していないことから、連結対象としてい」ないのである[11]。

分析した期間は、日本国政府の連結貸借対照表が公表された平成12年度決算分（平成13年３月31日）を2000年度として分析期間を開始し、現時点での最新の平成29年度決算分（平成30年３月31日）を2017年度として18年間を分析した。ただし、日本国政府の連結貸借対照表の2000年度～2001年度および日本国政府の貸借対照表の2000年度～2002年度の数値は、試算となっている。

第１表　日本国政府の貸借対照表

（%：資産合計に占める割合）

年度	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
金融資産	68.0	66.5	64.4	63.6	61.5	59.7	58.4	55.3	51.2	50.0	49.7	50.5	52.3	54.0	55.2	54.3	54.0	52.8
現金･預金	5.8	4.9	3.8	6.1	4.8	5.0	5.3	4.6	3.6	2.9	2.5	2.8	3.4	2.9	4.1	7.8	8.2	7.1
有価証券	15.2	15.6	8.4	10.2	11.4	12.2	12.9	15.1	14.9	14.2	14.3	15.5	17.3	19.8	20.5	18.6	17.8	17.7
貸付金	40.9	39.7	46.8	42.0	39.4	35.6	30.8	27.4	24.5	24.0	23.7	22.7	21.8	21.1	20.3	17.3	17.2	16.8
出資金	6.0	6.3	5.3	5.3	6.0	6.9	9.3	8.3	8.2	9.0	9.2	9.4	9.7	10.2	10.3	10.7	10.8	11.2
運用寄託金	3.2	5.4	5.4	7.9	10.2	12.0	13.7	16.2	18.8	18.8	18.5	17.6	16.7	16.1	15.3	15.8	16.2	16.6
有形固定資産	25.0	24.8	27.1	25.5	25.5	25.6	25.3	26.0	27.5	28.5	29.2	28.8	28.2	27.2	26.4	26.8	27.0	27.2
国有財産	24.7	24.5	6.3	6.1	5.9	5.4	5.3	5.3	5.5	5.7	5.6	5.3	5.1	4.5	4.3	4.4	4.4	4.5
公共用財産	0.3	0.2	19.5	19.0	19.1	19.8	19.7	20.3	21.5	22.4	23.2	23.1	22.7	22.4	21.8	22.2	22.3	22.4
資産合計(兆円)	740.5	753.9	657.5	690.3	700.6	690.5	704.5	695.0	664.8	647.0	625.1	628.9	640.2	652.7	679.8	672.4	672.7	670.5
金融負債	44.3	48.8	78.3	86.8	95.2	102.7	105.1	110.9	119.1	129.7	139.6	146.7	149.3	151.0	149.0	153.7	157.4	160.4
公債	36.0	40.6	68.5	73.6	83.0	90.8	92.5	97.2	102.5	111.4	121.4	125.8	129.2	131.1	130.2	136.5	140.2	144.2
政府短期証券	5.9	5.6	7.1	10.2	9.1	8.6	9.3	10.5	13.3	15.0	14.5	17.1	15.9	15.6	14.6	12.8	12.6	11.5
借入金	2.5	2.6	2.7	2.9	3.1	3.3	3.3	3.2	3.3	3.4	3.7	3.9	4.2	4.4	4.3	4.4	4.6	4.7
公的年金預り金	21.0	20.9	24.6	20.7	21.4	21.4	20.6	20.2	20.5	20.2	19.8	18.8	17.9	17.2	16.7	17.2	17.7	17.9
負債合計(%)	124.4	126.7	136.8	137.1	139.9	142.1	139.6	140.7	147.8	157.6	166.8	173.0	174.5	175.1	172.4	177.5	181.6	184.8
資産・負債差額(%)	△ 24.4	△ 26.6	△ 36.8	△ 37.1	△ 39.9	△ 42.1	△ 39.6	△ 40.7	△ 47.8	△ 57.6	△ 66.8	△ 73.0	△ 74.5	△ 75.1	△ 72.4	△ 77.5	△ 81.6	△ 84.8
負債および資産･負債差額合計(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：財務省「国の財務書類（一般会計・特別会計）」各年度の貸借対照表より作成。　注：2000～2002年度は試算。

第２表　日本国政府の連結貸借対照表

（%：連結資産合計に占める割合）

年度	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
連結金融資産	63.0	62.3	62.1	64.1	63.1	64.1	63.7	63.2	60.3	60.0	59.7	60.5	62.3	64.5	66.7	67.6	68.4	68.7
連結現金･預金	6.3	5.8	6.0	9.2	7.9	8.1	7.5	6.0	4.6	4.5	4.0	3.7	5.0	5.7	7.8	12.1	13.1	12.1
連結有価証券	17.0	18.7	19.3	17.4	19.1	21.9	23.7	26.3	29.1	29.4	30.0	31.4	33.1	35.8	37.4	36.7	37.4	39.0
連結貸付金	38.6	36.8	35.8	36.0	34.5	32.2	30.4	29.2	24.9	24.3	24.2	23.9	22.6	21.2	19.8	16.8	16.0	15.6
連結出資金	1.1	1.0	1.0	1.6	1.6	1.8	2.1	1.8	1.7	1.7	1.4	1.4	1.5	1.7	1.7	2.1	1.9	1.9
連結有形固定資産	31.6	32.7	33.1	30.5	31.8	31.6	32.0	32.3	35.1	35.1	35.3	34.4	32.7	30.8	28.8	28.0	27.3	27.0
連結国有財産	31.2	32.3	32.7	8.4	9.5	9.0	9.0	9.1	9.8	9.8	9.7	9.3	8.8	8.0	7.4	7.3	7.0	6.9
連結公共用財産				21.4	21.6	21.8	22.2	22.5	24.4	24.4	24.7	24.3	23.1	22.1	20.7	20.1	19.7	19.5
連結資産合計(兆円)	809.2	821.9	814.6	833.6	839.2	839.2	832.9	829.4	772.0	778.3	768.9	782.4	822.2	863.1	932.1	958.9	986.3	1,000.9
連結金融負債	42.9	46.1	50.9	54.1	56.4	58.1	60.0	62.9	70.7	76.8	83.5	89.6	91.2	92.4	91.0	94.2	95.8	96.4
連結公債	32.2	35.1	39.6	41.6	45.5	47.8	49.6	50.4	56.2	61.3	68.6	73.5	75.4	76.7	76.8	81.4	83.6	85.4
連結政府短期証券	5.4	5.0	5.5	7.7	6.7	5.9	6.3	8.2	10.1	11.2	10.8	12.0	11.5	11.5	10.4	9.0	8.6	7.7
連結借入金	5.3	6.0	5.7	4.8	4.2	4.4	4.1	4.3	4.4	4.2	4.1	4.2	4.3	4.2	3.9	3.9	3.6	3.4
連結公的年金預り金	20.9	20.9	21.3	17.6	18.3	18.0	17.8	17.4	18.1	17.2	16.6	15.6	14.4	13.4	12.6	12.5	12.4	12.4
連結独立行政法人等債券	4.0	4.3	4.8	5.9	6.5	7.1	6.8	6.9	4.9	5.2	5.5	5.6	5.6	5.6	5.3	5.1	5.1	5.3
連結郵便貯金	30.9	29.1	28.6	26.4	25.1	23.6	22.3	21.8	22.9	22.5	22.6	22.3	21.3	20.3	18.9	18.4	18.0	17.8
連結責任準備金	15.7	15.7	15.4	16.9	16.8	16.5	16.3	15.9	16.3	15.6	15.3	14.4	13.3	12.2	11.1	10.5	10.0	9.6
連結負債合計(%)	124.5	126.0	131.0	130.3	132.0	131.3	131.6	132.7	140.7	145.9	152.3	156.4	154.4	152.3	147.1	148.5	149.0	149.2
連結資産･負債差額(%)	△ 24.5	△ 26.0	△ 31.0	△ 30.3	△ 32.0	△ 31.3	△ 31.6	△ 32.7	△ 40.7	△ 45.9	△ 52.3	△ 56.4	△ 54.4	△ 52.3	△ 47.1	△ 48.5	△ 49.0	△ 49.2
連結負債および連結資産･負債差額合計(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：財務省「連結財務書類」各年度の貸借対照表より作成。　注：第１の１表と区別するために勘定科目に「連結」を加えた。2000～2001年度は試算。

第３表　日本における法人企業の貸借対照表

（%：資産合計に占める割合）

年度	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
法人企業の金融資産	46.2	45.3	45.4	45.9	47.1	48.2	49.3	48.0	48.8	49.0	50.4	51.2	52.4	52.6	53.1	52.9	54.3	55.3
法人企業の現金・預金	10.8	10.5	10.8	10.5	10.7	10.4	10.6	10.0	10.2	11.0	11.4	11.1	11.7	11.4	11.8	12.6	12.8	12.6
法人企業の受取手形・売掛金	18.1	17.4	16.6	16.8	17.0	17.3	17.5	18.1	14.9	14.3	14.3	14.7	14.8	14.4	14.7	14.1	13.8	13.8
法人企業の有価証券	9.7	9.7	9.7	10.6	11.9	13.2	14.1	12.5	15.5	15.5	16.2	16.8	17.9	18.6	18.7	18.1	19.6	20.5
法人企業のその他投資	7.5	7.6	8.2	8.0	7.5	7.3	7.2	7.4	8.2	8.3	8.6	8.7	8.0	8.2	7.7	8.2	8.1	8.3
法人企業の棚卸資産	8.5	8.4	8.1	7.8	7.7	8.0	8.1	9.1	8.2	7.8	7.0	7.1	7.3	7.0	7.1	6.8	6.6	6.8
法人企業の有形固定資産	36.8	38.0	37.8	37.1	36.2	34.6	33.4	33.5	32.6	31.9	32.0	31.2	29.8	29.8	29.0	28.7	27.7	26.7
法人企業の土地	13.1	12.7	13.5	13.4	12.7	12.2	11.8	11.7	12.6	12.7	12.9	12.7	12.2	12.7	11.7	11.2	10.8	10.5
法人企業の土地以外	23.7	25.3	24.3	23.7	23.5	22.4	21.7	21.8	20.0	19.2	19.1	18.5	17.6	17.1	17.3	17.5	16.8	16.2
法人企業の資産合計	1,309.5	1,243.1	1,234.8	1,230.7	1,285.5	1,343.6	1,390.2	1,353.8	1,402.8	1,437.3	1,446.0	1,470.7	1,437.1	1,527.3	1,568.5	1,592.4	1,647.8	1,760.1
法人企業の金融負債	56.3	56.3	54.9	53.4	52.2	50.0	48.5	48.6	48.5	47.6	46.1	46.4	44.8	44.5	43.5	42.6	42.5	41.6
法人企業の支払手形・買掛金	15.2	14.1	13.7	14.1	14.0	14.2	14.3	14.6	11.3	11.0	11.1	11.4	11.3	10.9	11.3	10.4	10.2	10.3
法人企業の短期借入金	15.2	16.1	15.2	14.3	13.6	13.4	11.7	12.0	12.4	12.9	11.3	11.1	11.3	11.0	10.3	10.1	9.5	9.6
法人企業の長期債務	25.9	26.2	26.0	25.0	24.7	22.4	22.5	22.0	24.8	23.7	23.7	23.9	22.2	22.6	22.0	22.1	22.8	21.7
法人企業の負債合計	74.3	74.8	72.6	71.7	70.2	69.9	67.2	66.5	66.1	65.5	64.4	65.1	62.6	62.4	61.1	60.0	59.4	58.3
法人企業の純資産合計	25.7	25.2	27.4	28.3	29.8	30.1	32.8	33.5	33.9	34.5	35.6	34.9	37.4	37.6	38.9	40.0	40.6	41.7
法人企業の資本金	6.4	6.9	7.0	7.1	7.0	6.7	6.5	6.7	7.0	7.4	7.4	7.2	7.3	6.9	6.7	6.6	6.4	5.9
法人企業の資本準備金	3.8	4.1	4.3	4.4	5.4	5.5	5.7	5.1	5.9	6.6	6.1	6.4	6.3	5.9	5.7	5.9	5.9	5.5
法人企業のその他資本剰余金	0.6	0.7	0.8	1.7	1.2	1.6	1.2	1.6	1.7	2.1	2.2	2.5	2.6	2.8	3.1	3.6	3.3	4.4
法人企業の積立金	13.7	13.8	14.3	13.9	14.5	14.4	14.4	14.5	15.0	15.0	14.9	14.0	13.9	13.1	13.1	13.0	12.5	12.0
法人企業の繰越利益剰余金	0.5	-1.1	0.3	0.5	0.7	0.0	2.9	4.5	4.0	3.0	4.6	4.4	6.4	7.7	8.7	10.1	11.5	12.9
法人企業の負債および純資産合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：政府統計の総合窓口https://www.e-stat.go.jp「法人企業統計」金融業・保険業以外の業種(原数値)、各年度より作成。注：勘定科目の配列などは、第１表および第２表に準じた。

第４表　日本における総人口、法人企業の数および労働者数、一人当たりの資産

（万人、万円）

年度	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
日本の総人口（万人）	12,693	12,732	12,749	12,769	12,779	12,777	12,790	12,803	12,808	12,803	12,806	12,783	12,759	12,741	12,724	12,710	12,693	12,671
法人企業数(万社)	255	261	263	264	270	272	274	276	277	277	276	275	274	274	275	277	278	279
法人企業の労働者数(万人)	4,518	4,284	4,209	4,255	4,560	4,770	4,784	4,686	4,724	4,670	4,607	4,658	4,624	4,541	4,572	4,577	4,639	4,775
人口一人当たりの資産（万円）	583.4	592.1	515.7	540.6	548.3	540.4	550.8	542.9	519.0	505.4	488.2	492.0	501.7	512.3	534.3	529.0	530.0	529.2
人口一人当たりの連結資産（万円）	637.5	645.5	639.0	652.8	656.7	656.8	651.2	647.8	602.8	607.9	600.5	612.1	644.4	677.4	732.6	754.5	777.1	789.9
労働者一人当たりの資産（万円）	1,638.8	1,759.8	1,562.2	1,622.4	1,536.4	1,447.5	1,472.6	1,483.2	1,407.3	1,385.4	1,356.9	1,350.0	1,384.6	1,437.3	1,487.0	1,468.9	1,450.1	1,404.3
労働者一人当たりの連結資産（万円）	1,790.9	1,918.5	1,935.5	1,959.4	1,840.2	1,759.3	1,740.9	1,770.0	1,634.4	1,666.4	1,669.0	1,679.6	1,778.2	1,900.7	2,038.9	2,095.0	2,126.0	2,096.3
労働者一人当たりの法人企業資産（万円）	2,898.3	2,901.9	2,934.0	2,892.6	2,819.0	2,816.5	2,905.9	2,889.0	2,969.6	3,077.5	3,138.6	3,156.9	3,108.3	3,363.4	3,431.1	3,478.9	3,551.8	3,686.3

出所：政府統計の総合窓口https://www.e-stat.go.jpにより作成。総人口は、2015年度までが「人口推計の長期時系列データ（平成12年～27年）」、2016・2017年度が「人口推計 平成30年10月1日現在」による。

「法人企業統計」金融業・保険業以外の業種(原数値)各年度より、法人企業数は各期末における母集団、法人企業の労働者数は同資料各期末における期中平均の役員数・従業員数とした。

なお、この分析では、『国の財務書類』における一般会計と特別会計を合算した貸借対照表（以下、「日本国政府の貸借対照表」）、独立行政法人等を含めた連結貸借対照表（以下、「日本国政府の連結貸借対照表」）、日本における営利法人を対象に調査した『法人企業統計』の金融業・保険業以外の全業種・全規模の貸借対照表（以下、「法人企業の貸借対照表」）を用いた。

「法人企業統計調査は、法人単体での計数を収集して」[12] いるので、「日本国政府の貸借対照表」と比較することが適当と思われるが、同時に日本国政府全体を会計分析するには「日本国政府の連結貸借対照表」を含めて分析することにした。

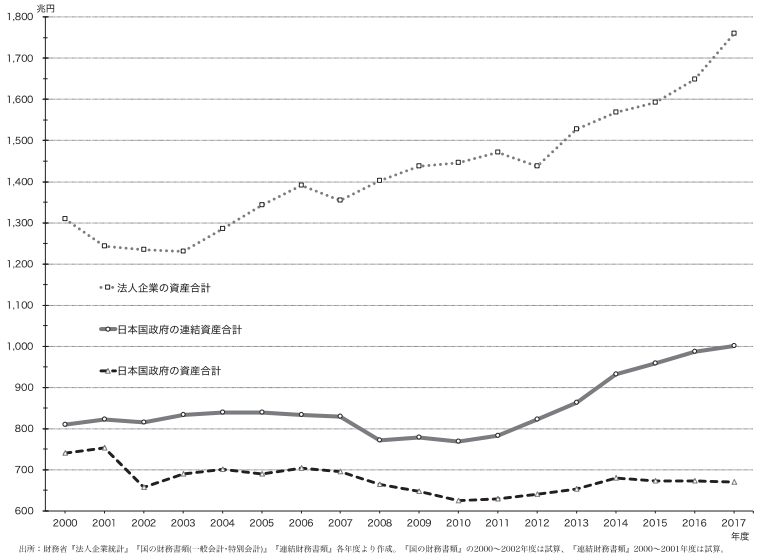
この分析を進めるにあたって、全体像を「日本国政府の連結貸借対照表」でとらえ、「日本国政府の貸借対照表」と「法人企業の貸借対照表」という単体同士の比較を試みた。

1．日本における政府および法人企業の資産合計について

『国の財務書類』の貸借対照表および連結貸借対照表と、『法人企業統計』の金融業・保険業以外の全規模・全業種の貸借対照表との比較をする際、『国の財務書類』の勘定科目の配列は流動性でも固定性でもないため、『法人企業統計』を『国の財務書類』に合わせて比較可能な表を作成したところ、第１表〜第３表となった。

日本における政府および法人企業の資産合計は、第１図の通り。日本国政府の連結資産合計は、2005年度をピークに2007年度まで800兆円超で推移し、2008年度に800兆円を割って2010年度を底に、その後は増加し続け、2017年度には1,000兆円に達した。日本国政府の資産合計は、2001年度をピークに、2002・2010年度の底から僅かに増加しながらも、2007年度以降は700兆円を下回り続け、全体としては緩い減少傾向にある。法人企業は、2003年度の1,230兆円を底に、2007・2012年度に減少したものの、1,760兆円でピークの2017年度まで増加傾向にある。

日本政府の連結資産合計は、法人企業の資産合計に対して、2008年度に６割を大幅に下回り、2015年度に再び６割に達したものの、翌年度から再び６割を下回っている。日本政府の資産合計は、法人企業の資産合計に対して、2008年度に５割を大幅に下回り、2016年度まで４割台で推移し、2017年度には４割を下回っている。



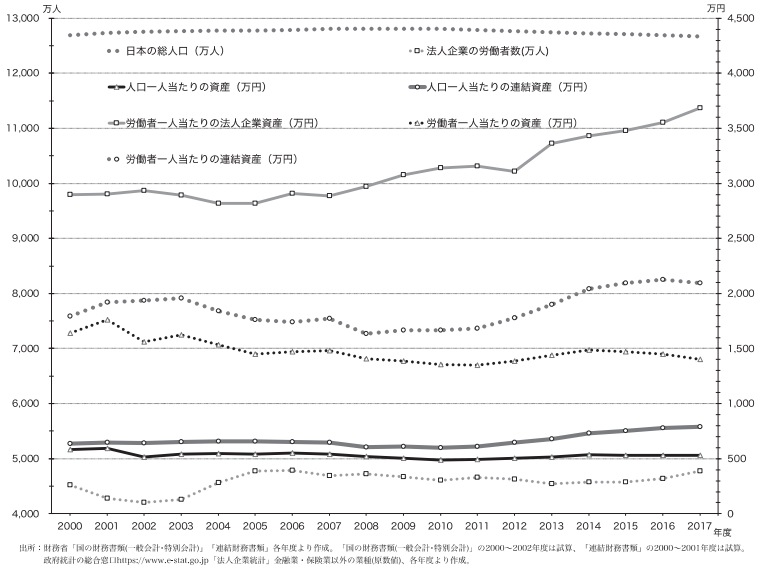
出所：財務省『法人企業統計』『国の財務書類(一般会計・特別会計)』『連結財務書類』各年度より作成。「国の財務書類」の2000〜2002年度は試算、「連結財務書類」2000〜2001年度は試算。
政府統計の総合窓口https://www.e-stat.go.jp「法人企業統計」金融業・保険業以外の業種(原数値)、各年度より作成。

第１図　日本における政府および法人企業の資産合計

2．一人当たりの資産について

日本における総人口および法人企業の労働者数の一人当たりの資産は、第４表を第２図で見える化した。日本の総人口は、2000年度の１億2,693万人から、１億2,808万でピークとなった2008年度まで緩やかな増加傾向で、その後は緩やかに減少し続け、2017年度は2000年度を下回っている。法人企業の労働者数は、2001～2003年度に総人口の３分の１となった以外は、総人口の３分の１を超えている。ただし、法人企業の労働者数は、金融業・保険業以外の全業種・全規模の各期末における期中平均の役員数と従業員数の合計である。

人口一人当たりの連結資産は、2013年度までは600万円以上、2014年度からは700万円を超えている。人口一人当たりの資産は600万円以下となっている。参考までに、労働者一人当たりの日本国政府の連結資産は、２倍を超えずに推移している。労働者一人当たりの日本国政府の資産は、2007年度までは２倍未満で、以後は２倍を超えて、2017年度には2.6倍にまで広がった。



出所：財務省「国の財務書類(一般会計+特別会計)」「連結財務書類」各年度より作成。「国の財務書類(一般会計+特別会計)」の2000～2002年度は試算、「連結財務書類」の2000～2001年度は試算。
政府統計の総合窓口https://www.e-stat.go.jp「法人企業統計」金融業・保険業以外の業種(原数値)、各年度より作成。

第２図　日本における総人口と法人企業の労働者数、および一人当たりの資産

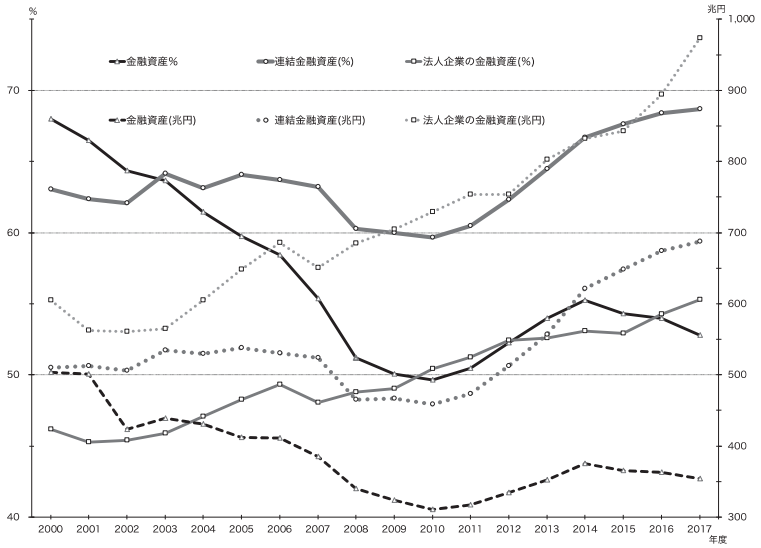
3．金融資産について

「金融資産とは、現金預金、受取手形、売掛金及び貸付金等の金銭債権、株式その他の出資証券及び公社債等の有価証券並びに先物取引、先渡取引、オプション取引、スワップ取引及びこれらに類似する取引（以下「デリバティブ取引」という。）により生じる正味の債権等をいう。」[13] ことから、日本政府の金融資産を、現金・預金、有価証券、貸付金、出資金とした。法人企業は、現金・預金、受取手形・売掛金、流動資産の有価証券と固定資産の投資その他の資産の投資有価証券、固定資産の投資その他の資産のその他の投資とした。

日本国政府の連結金融資産の、資産合計に占める割合（以下、「割合」）は、2010年度に分析期間で唯一６割を下回り、その後は上昇し続け、2017年度はピークの68.7％となっている。同様に、日本国政府の金融資産は、2010年度に分析期間で唯一５割を下回って、その後は連結金融資産と同じように上昇しながらも、2015年度から下降している。法人企業の資産合計に占める金融資産は、2001年度の45.3％を底に上昇傾向で、2010年度には５割に達し、2017年度には

ピークの55.3%となっている。

日本国政府の連結金融資産の金額は、2008年度に500兆円を下回り、2010年度には底となって、その後は増加し続け、2012年度に500兆円を、2014年に600兆円を超え、2017年度にはピークの687兆円となっている。日本国政府の金融資産の金額は、2002年度から500兆円を大幅に下回って減少し続け、2007年度から400兆円を下回り、2010年度は底となっている。法人企業の金融資産は、2001年度に600兆円を下回って、2002年度の560兆円を底に、2004年度以降は600兆円に、2009年度には700兆円に、2013年度には800兆円に達し、2017年度には900兆円を著しく上回ってピークの973兆円となっている。



出所：財務省「国の財務書類(一般会計・特別会計)」「連結財務書類」各年度より作成。「国の財務書類(一般会計・特別会計)」の2000～2002年度は試算、「連結財務書類」の2000～2001年度は試算。
政府統計の総合窓口https://www.e-stat.go.jp「法人企業統計」金融業・保険業以外の業種(原数値)、各年度より作成。

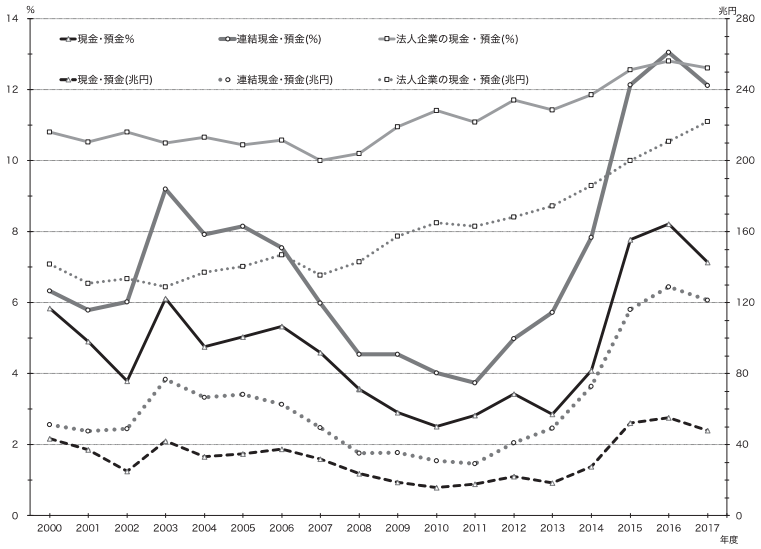
第３図　日本における政府と法人企業の金融資産

日本国政府の連結金融資産（金融資産）は、割合も金額もほぼ同様の変化となっている。

３．２　現金・預金について

日本国政府の連結現金・預金（現金・預金）は、2003（2003）年度から下降・減少し続け、底となった2011（2010）年度以降は、ピークの2016年度まで上昇・増加している。法人企業の現金・預金の割合は、分析期間を通して１割を超え、2007年度を底に2016年度のピークまで上昇している。法人企業の現金・預金の金額は、2003年度を底に増加傾向で、2015年度からは200兆円を超えている。

「通常、貸借対照表の『現金・預金』に計上されている金額は、会計年度末時点においてどれだけの現金及び預金を保有している



出所：財務省「国の財務書類(一般会計・特別会計)」「連結財務書類」各年度より作成。「国の財務書類(一般会計・特別会計)」の2000～2002年度は試算、「連結財務書類」の2000～2001年度は試算。
政府統計の総合窓口https://www.e-stat.go.jp「法人企業統計」金融業・保険業以外の業種(原数値)、各年度より作成。

第３－２　図　日本における政府と法人企業の現金・預金

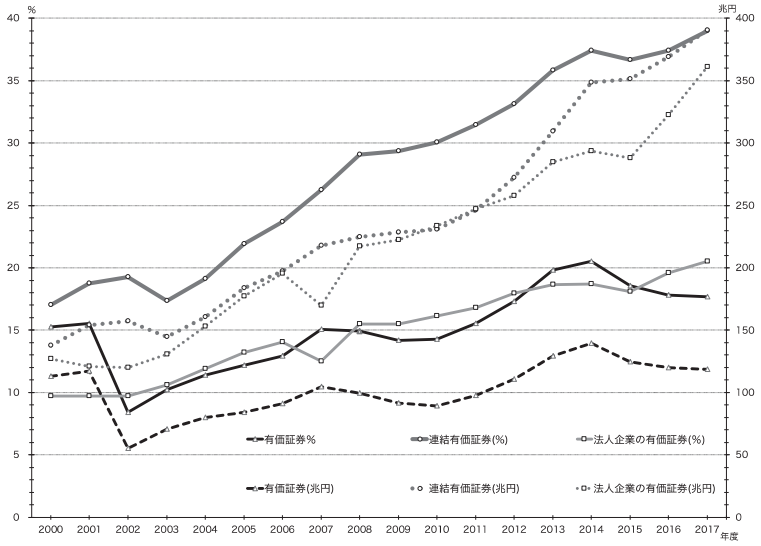
かを表」すが、「『国の財務書類』における『現金・預金』に計上されている金額は、国の会計には出納整理期間が存在するため、国が会計年度末（３月31日）に実際に保有している現金及び預金の有高には一致してい」ない[14]。

３．３　有価証券について

日本国政府の有価証券は、「為替介入（円売り・外貨買い）により取得した外貨証券などで」、これに対応する負債が「為替介入の財源として発行した外国為替資金証券など」の政府短期証券である[15]。

日本国政府の連結有価証券の割合は、2005年度に２割を、2010年度に３割を超え、2017年度には４割近くまで上昇し続けている。日本国政府の有価証券の割合は、2003年度に１割を、2014年度に２割を超えたが、翌年度から２割を下回って下降している。法人企業の有価証券の割合は、2003年度に１割に、2017年度に２割に達して、日本国政府の連結有価証券ほどではないが緩やかに上昇している。

日本国政府の連結有価証券の金額は、2007年度に200兆円を、2013年度に300兆円を超え、2017年度には400兆円近くまで上昇し続けている。日本国政府の有価証券の割合は、2007年度に100兆円を超えたものの翌年度から下回り、2012年度に再び100兆円を超えて、割合と同様に推移している。法人企業の有価証券の金額は、2008年度に200兆円を、2016年度に300兆円を超えて、日本国政府の連結有価証と並ぶように増加している。



出所：財務省「国の財務書類(一般会計･特別会計)」「連結財務書類」各年度より作成。「国の財務書類(一般会計･特別会計)」の2000～2002年度は試算、「連結財務書類」の2000～2001年度は試算。
政府統計の総合窓口https://www.e-stat.go.jp「法人企業統計」金融業・保険業以外の業種(原数値)、各年度より作成。

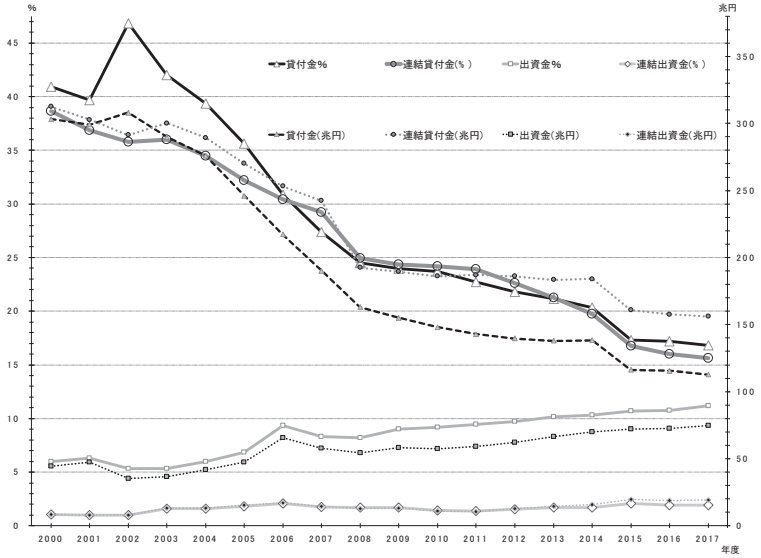
第３－３図　日本における政府と法人企業の有価証券

３．４　貸付金および出資金について

貸付金は、「地方公共団体、特殊法人及び独立行政法人等に対する財政投融資特別会計等の貸付金を計上してい」て、そ「の大部分は、財政融資資金貸付金となってい」る。「政策上必要な資金を財投債の発行等により調達したもので」ある[16]。

連結貸付金（貸付金）の割合は下降傾向で、2007年度から３割を、2014（2015）年度から２割を下回っている。連結貸付金（貸付金）の金額も減少傾向で、2004（2003）年度から300兆円を、2008（2007）年度から200兆円を下回っている。

2017年度の貸付金は、「財政融資資金貸付金において地方公共団体や政策金融機関等への貸付規模が縮小傾向にある中、貸付の回収が平成29年度の新規貸付を上回ったことなどにより、全体として2.7兆円減の112.8兆円と」[17]、金額・割合ともに分析期間の底となっている。



出所：財務省「国の財務書類(一般会計・特別会計)」「連結財務書類」各年度より作成。「国の財務書類(一般会計・特別会計)」の2000～2002年度は試算、「連結財務書類」の2000～2001年度は試算。

第３－４図　日本国政府の貸付金および出資金

出資金は、「独立行政法人への出資金や政府が保有義務を負っている日本電信電話株式会社株式など」[18] であり、たとえば2017年度は、「出資金（19.4兆円：連結による減55.4兆円）・国の財務書類に計上されている出資金（74.8兆円）のうち、連結対象法人への出資金（56.9兆円）は連結対象法人の純資産と相殺され、連結財務書類の出資金には、国及び連結対象法人から連結対象外の法人への出資金（19.4兆円）が計上され」[19] ることから、出資金については、国の出資金の４分の３を占めるのが連結対象法人への出資金のため、連結出資金はその分が相殺されて国の出資金の４分の１となっている。この場合は、連結によって出資金が減少していることになる。2017年度の出資金74.8兆円の内訳は、「独立行政法人31.7兆円、特殊会社（政府保有義務分を含む）21.9兆円、国際機関10.1兆円、国立大学法人等7.1兆円、その他の特殊法人3.0兆円」[20] である。

「日本郵政（株）の保有する現金・預金や年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）が保有する有価証券等が加わる一方で、連結対象法人への出資金が相殺消去されること等から、資産合計額は国の財務書類に比べ330.4兆円増加し」[21] ている。

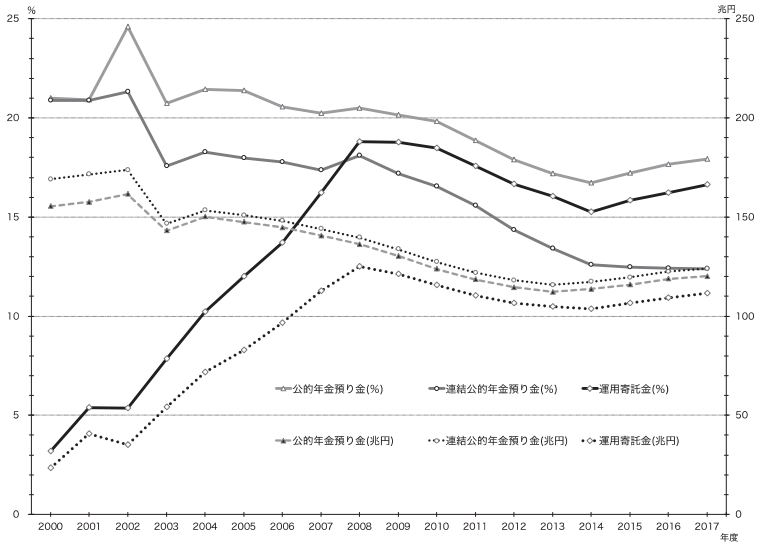
連結出資金は２％前後で推移して20兆円に達していないのに対して、出資金は2013年度から１割を超え、2014年度から70兆円を超えている。

４．運用預託金および公的年金預り金について

「将来の年金給付財源の一部（保険料収入から既に年金支給された残り）については『運用寄託金』等の資産として保有されているため、当該資産に見合う金額を『公的年金預り金』として計上するという考え方を採ってい」る[22]。

第４図で日本国政府の運用預託金の割合は、2004年に10％を超え、2008・2009年度にピークの18.8％に達してからは緩やかに下降している。日本国政府の運用預託金の金額は、2007年に100兆円を超え、2008年度にピークの125兆円に達してからは緩やかに減少している。

これに対して、日本政府の連結公的年金預り金（公的年金預り金）の割合は、2003（2003）年度に20%を、2012（非該当）年度には15%を下回って、下降傾向である。日本政府の連結公的年金預り金（公的年金預り金）の金額は、2008（2008）年度に140兆円を、2010（2010）年度に130兆円を、2012（2011）年度に120兆円を下回っている。



出所：財務省「国の財務書類(一般会計・特別会計)」「連結財務書類」各年度より作成。「国の財務書類(一般会計・特別会計)」の2000～2002年度は試算、「連結財務書類」の2000～2001年度は試算。

第４図　日本国政府の運用寄託金および公的年金預り金

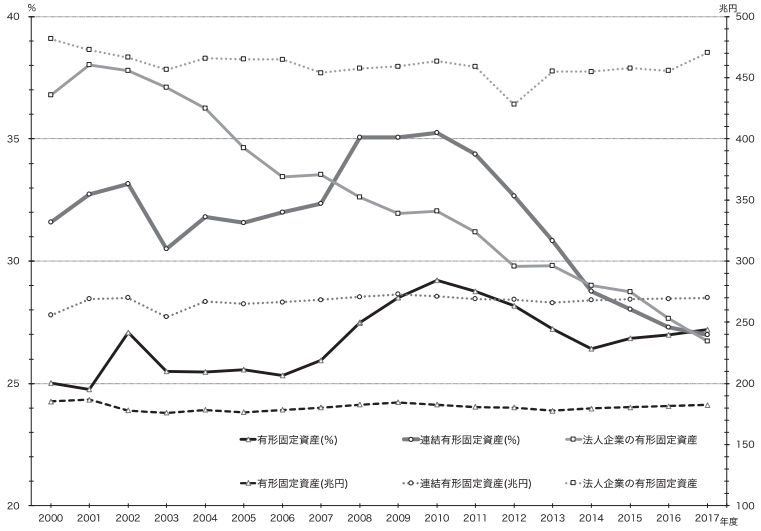
５．有形固定資産について

日本国政府における有形固定資産は、公共用財産（道路、河川など）、国有財産（国の庁舎、防衛、空港施設など）、物品等（車両、事務機器など）で構成される[23)]。

第５図で、日本国政府の連結有形固定資産は、2013年度まで３割を超えていたが、2014年度以降は３割を下回って、2010年度をピークに下降し続けている。

日本国政府の有形固定資産は、３割に及ばず、連結有形固定資産と同様に2010年度をピークに下降しているが、2015年度以降は連結有形固定資産とは対照的に上昇している。

法人企業の有形固定資産は、2001年度をピークに下降傾向にあり、2012年度には３割を下回り、2017年度は日本国政府の連結有形固定資産も有形固定資産にも僅かながら下回っている。

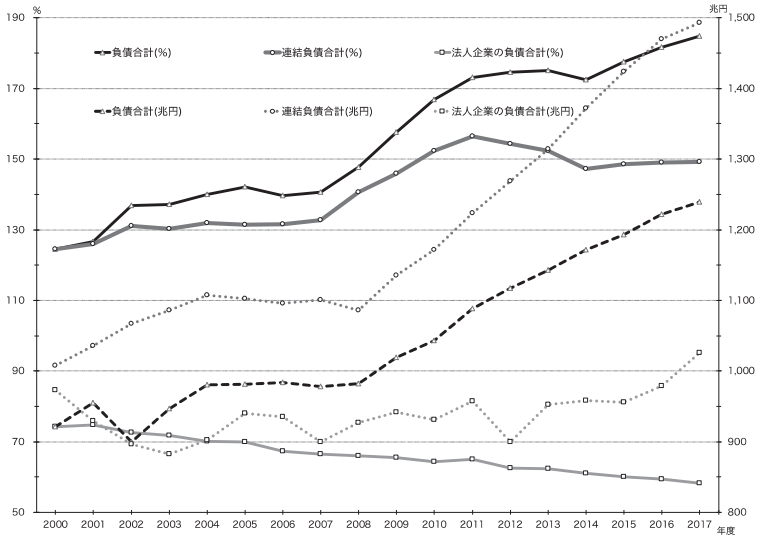


出所：財務省「国の財務書類(一般会計・特別会計)」「連結財務書類」各年度より作成。「国の財務書類(一般会計・特別会計)」の2000～2002年度は試算、「連結財務書類」の2000～2001年度は試算。
政府統計の総合窓口https://www.e-stat.go.jp「法人企業統計」金融業・保険業以外の業種(原数値)、各年度より作成。

第５図　日本における政府と法人企業の有形固定資産

6．負債合計について

日本における政府と法人企業の負債合計は、第６図上段の日本国政府の連結負債合計（負債合計）の割合は、130％を2002（2002）年度から、140％を2008（2007）年度から、150％を2010（2009）年度から超えている。連結負債合計は2014年度から150％を下回っているものの、負債合計は2011年度から170％を、2016年度から180％を超えている。



第６図　日本における政府と法人企業の負債合計

第６図中段の日本国政府の連結負債合計（負債合計）の金額は、割合とは対照的に、1,000兆円を2000（2009）年度から、1,100兆円を2004（2012）年度から、1,200兆円を2011（2016）年度から超え、連結負債合計は1,300兆円を2013年度から、1,400兆円を2015年度から超えている。日本国政府の連結負債合計（負債合計）は、割合も金額も第８図下段で推移している法人企業の負債合計とは対照的である。法人企業の負債合計の割合は、2005年度に７割を、2016年度に６割を下回って、下降傾向となっている。法人企業の負債合計の金額は、2002・2003年度に900兆円を若干下回った以外は900兆円台で推移して、2017年度には1,000兆円を超えている。

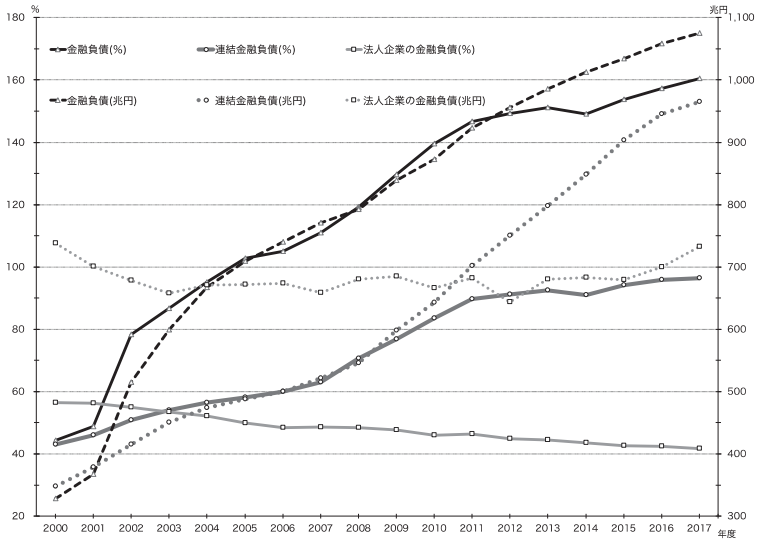
7．金融負債について

「金融負債とは、支払手形、買掛金、借入金及び社債等の金銭債務並びにデリバティブ取引により生じる正味の債務等をいう。」[24] ことから、日本政府の金融負債を、公債、政府短期証券、借入金とした。法人企業の金融負債は、支払手形・買掛金、短期借入金、長期債務とした。第７図で、日本における政府と法人企業の金融負債を分析した。

日本国政府の連結金融負債の、負債および資産・負債差額合計に占める割合（以下、「割合」）は、上昇し続けて、2002年度には50％に、2006年度には60％に、2008年度には70％に達している。さらに2010年度には80％を、2012年度には90％を超えている。同様に、日本国政府の金融負債の割合は、連結金融負債よりも著しい上昇傾向にあり、2005年度には100％を、2013年度には150％を超えて、2017年度には160％とピークに達している。法人企業の金融負債の割合は、2000年度の56.3％をピークに、緩やかに下降して、2006年度には50％を下回り、2017年度は41.6

%の底となっている。

日本国政府の連結金融負債の金額は、増加し続けて、2002年度には400兆円を、2007年度には500兆円を、2011年度には700兆円を、2015年度には900兆円を超えて、2017年度にはピークの965兆円となっている。日本国政府の金融負債の金額は、増加し続けて、2005年度には700兆円を、2009年度には900兆円を、2014年度には1,000兆円を超えて、2017年度にはピークの1,075兆円となっている。法人企業の金融負債の金額は、737兆円でピークの2000年度から緩やかに減少して、2002年度に700兆円を下回り、2012年度は644兆円を底に、2016年度には700兆円に達し、2017年度は2000年度に次いでいる。



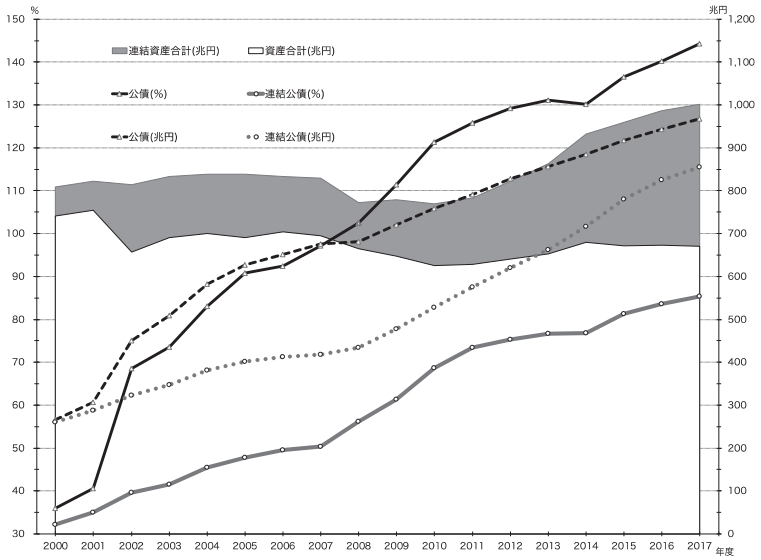
出所：財務省「国の財務書類(一般会計・特別会計)」「連結財務書類」各年度より作成。「国の財務書類(一般会計・特別会計)」の2000～2002年度は試算、「連結財務書類」の2000～2001年度は試算。
政府統計の総合窓口https://www.e-stat.go.jp「法人企業統計」金融業・保険業以外の業種(原数値)、各年度より作成。

第７図　日本における政府と法人企業の金融負債

７．２　公債について

金融負債の大半を占めるのが、日本国の政府の公債である。第７－２図で、連結資産合計（資産合計）の領域グラフと比較してもその規模が一目瞭然だが、日本国政府の連結公債の割合は、2003年度に４割を、2007年度に５割を、2009年度に６割を、2011年度に７割を、2015年度に８割を超え、上昇し続けている。日本国政府の公債の割合は、2003年度に７割を、2004年度に８割を、2005年度に９割を、2008年度に10割を、2009年度に11割を、2010年度に12割を、2013年度に13割を、2016年度に14割を超え、上昇し続けている。

日本国政府の連結公債の金額は、2005年度に400兆円を、2010年度に500兆円



出所：財務省「国の財務書類(一般会計・特別会計)」「連結財務書類」各年度より作成。「国の財務書類(一般会計・特別会計)」の2000～2002年度は試算、「連結財務書類」の2000～2001年度は試算。

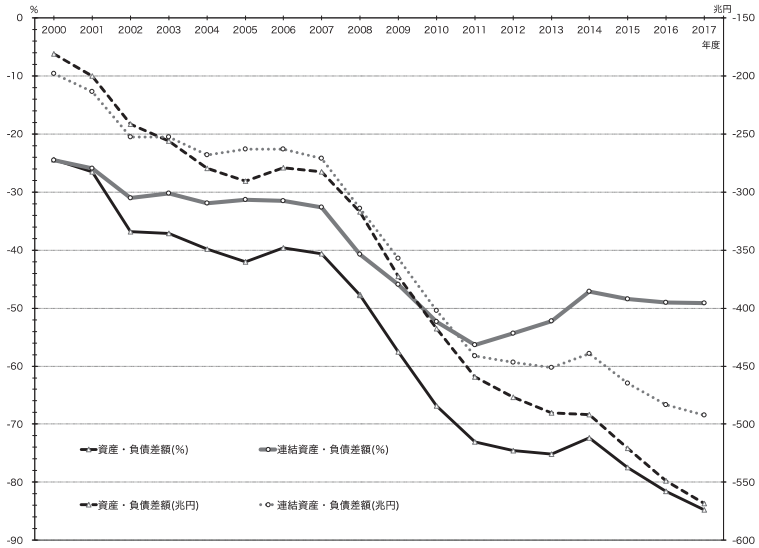
第７－２図　日本における政府の公債

を、2012年度に600兆円を、2014年度に700兆円を、2016年度に800兆円を超えて増加し続けている。日本国政府の公債の金額は、2009年度に700兆円を、2012年度に800兆円を、2015年度に900兆円を超えて増加し続けている。

2017年度の公債は、分析期間でピークの966.9兆円に達し、「公共事業費や出資金等の歳出の財源を調達するために発行した建設国債は1.3兆円増の274.6兆円、いわゆる赤字国債である特例国債は23.0兆円増の555.3兆円、原賠機構に対して発行された交付国債は3.6兆円増の5.5兆円となり（中略）、貸付の財源を調達するために発行した財政投融資特別会計国債（以下、財投債）は1.7兆円減の94.5兆円、復興事業に必要な財源として発行された復興債は1.5兆円減の5.5兆円、基礎年金の国庫負担の追加に伴い見込まれる費用の財源を消費税の増収で賄うまでのつなぎとして発行した年金特例国債は0.3兆円減の4.1兆円と」[25] いう内訳である。

8．資産・負債差額について

「貸借対照表の資産と負債の差額は、企業では純資産として取り扱われ」る「が、国の会計においては、企業会計のような払込資本に関する取引がなく、また、損益計算は行わないことから、稼得資本に関する取引も存在してい」ない。「また、資産と負債の差額の内訳については、その約半分が財務書類作成開始時に生じた差額であり、具体的な性格を明確にすることは困難であること、作成開始時以降は、資産・負債差額増減計算書を作成して、資産と負債の差額の増減要因を明らかにしていることから、資産と負債の差額は「資産・負債差額」として一括表示をすることとしてい」る[26]。



出所：財務省「国の財務書類(一般会計・特別会計)」「連結財務書類」各年度より作成。「国の財務書類(一般会計・特別会計)」の2000～2002年度は試算。「連結財務書類」の2000～2001年度は試算。

第８図　日本国政府の資産・負債差額

しかし、「『資産・負債差額』は、企業会計の『純資産』として表示されている部分に相当」する「が、国の会計においては、企業会計のような払込資本に関する取引がないこと、また、国の活動においては利益獲得を目的とせず損益計算の意義は乏しいことから、企業会計の『純資産の部』と同様の位置付けとすることは適当では」ないとしているため[27]、法人企業の純資産との比較は、その可能性も含めた今後の課題として、第８図では、法人企業の純資産と比較せずに、日本国政府だけの資産・負債差額を分析した。

日本国政府の連結資産・負債差額の割合は、2007年度までのマイナス３割台から、2008年度

からマイナス４割台、2010年度からマイナス５割台、2011年度を底に2014年度からマイナス５割を下回っている。日本国政府の資産・負債差額の割合は、2008年度まではマイナス５割未満まで下降し続け、2009年度にマイナス５割を、2010年度に６割を、2011年度に７割を、2016年度に８割を下回って、2014年度に若干上昇したものの、2012年度から上昇した連結資産・負債差額の割合に対して、資産・負債差額の割合は反対に下降し続けている。

日本国政府の連結資産・負債差額（金額）は、2007年度までのマイナス400兆円未満から、2008年度からマイナス400兆円台で2017年度にはマイナス500兆円近くまで達している。日本国政府の資産・負債差額（金額）は、2007年度まではマイナス300兆円未満まで下降し続け、2008年度からマイナス300兆円台と、2010年度からマイナス400兆円台と、2015年度からマイナス500兆円台と減少し続けている。割合と同様に2014年度に若干増加したものの、日本国政府の連結資産・負債差額（金額）も資産・負債差額（金額）も、減少し続けている。

お　わ　り　に

日本国を株式会社に見立て、いわゆる「日本国株式会社」“Japan Co., Ltd.”として、日本の法人企業（金融・保険業以外の全業種・全規模）と比較・検討を試みた。

「国の資産及び負債には、取得や保有の時期・形態が様々であるほか、資産として管理されているものの中には、これまで価額を把握していなかったものが多数あ」るが、「それが国の所有となる資産であって、サービス提供能力及び将来の経済的便益が存在する場合においては、一般的な売買市場がない場合であっても、決算資料に基づき取得原価を推計する等して貸借対照表に計上してい」る「点も企業会計にはない手法といえ」るように、企業会計と異なる点が多くみられた[28]。したがって、可能な限り法人企業のデータの方を、日本国政府のそれに合わせるように心がけたが、十分な分析とはいえない。

第５表　日本における政府と法人企業の金融比率

（%）

年度	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
連結金融比率	146.8	135.4	121.9	118.6	111.8	110.2	106.2	100.5	85.3	78.1	71.4	67.5	68.3	69.8	73.3	71.8	71.4	71.2
金融比率	153.4	136.3	82.2	73.3	64.6	58.2	55.6	49.9	43.0	38.6	35.6	34.4	35.0	35.7	37.1	35.3	34.3	32.9
法人企業金融比率	82.0	80.3	82.7	85.9	90.1	96.5	101.8	98.8	100.7	103.0	109.5	110.5	117.0	118.0	121.8	124.1	127.7	132.8

出所：財務省「連結財務書類」、「国の財務書類（一般会計・特別会計）」各年度の貸借対照表より作成。　注：「国の財務書類」の2000～2002年度、「連結財務書類」の2000～2001年度は試算。
政府統計の総合窓口https://www.e-stat.go.jp「法人企業統計」金融業・保険業以外の業種(原数値)、各年度より作成。
注：金融比率（%）：金融資産／金融負債、連結金融比率：「連結財務書類」より作成、金融比率：「国の財務書類」より作成、法人企業金融比率：「法人企業統計」より作成

そこで、それぞれ分析してきた金融資産および金融負債の関係を、金融負債に占める金融資産の割合を「金融比率」としてみたのが、第５表である。日本国政府の連結金融比率（金融比率）は、2008年度に100（50）％を、2009年度から80（40）％を下回って、下降傾向にあるのに対して、法人企業の金融比率は、2006年度に100％を、2011年度に110％を、2014年度に120％を上回って、上昇傾向にある。金融比率は、金融負債を金融資産でどの程度まかなうことができるかがわかるので、金融比率が100％を超えれば金融比率が良好で、100％未満ならば金融比率が悪化していることになる。分析した18年間の日本においては、政府と法人企業の金融比率が正反対の傾向となり、政府の金融比率は悪化の一途を辿り、法人企業の金融比率はますま

す良好になっていることになる。

ただし、拙稿で扱ってきた負債は、「負債勘定であり、債権債務取引でいう債務と区別された会計上の概念である。したがって、負債勘定は、資本勘定、資産勘定との関係においてはじめて意味をもつ。負債は自己資本とともに他人資本としての企業活動の資金源泉を表すものである」が、「負債勘定は企業活動において資本とともに資金の源泉であるが、利益が帰属する資本（エクイティ）と区別された資金源泉であるということができる」のである[29]。

しかし、第８図の資産・負債差額がマイナスになることは、どのように理解すべきであろうか。この点は、「資産が過去および現在の世代で蓄積された経済的資源であり、負債が将来の世代が返済すべき義務あるとすると、資産と負債の差額がマイナスになるとすれば、それはこれまでの世代が弁済することのできない将来への先送りされた負担を意味する。」[30] といえる。

国としての資産を単純に企業と比較することはできないものの、国の資産を安易に売却してはならない社会のインフラとして再評価することも必要となるであろうし、たとえば第２図で一人当たりの資産で分析したように、法人企業の労働者一人当たりの資産が、国民一人当たりの資産の２倍に及ぶことが、はたして正常で妥当であるのか否かなども、検証しなければならない。

企業会計と公会計の融合を試みたが、今後の課題が山積した。とはいえ、この分析で用いた『国の財務書類』と『法人企業統計』のどちらも、財務省が作成・公表したものであるから、公会計と企業会計を統一的に把握できるようになる可能性がないとはいえない。分析できなかった勘定科目や勘定相互の関連性などとともに、注記を含めたその他の財務書類の分析をさらに進め、両者の比較可能性が高まって、より一層分析が容易になる一助となれば幸いである。

１）会計学中辞典編集委員会『会計学中辞典』青木書店，2005年（以下、『会計学中辞典』），p.49

２）財務総合政策研究所のホームページ『法人企業統計調査』（以下、HP『法人企業統計調査』）の「調査の目的等」，https://www.mof.go.jp/pri/reference/ssc/outline.htm，下線は拙者

３）『会計学中辞典』pp.49-50，下線は拙者

４）『会計学中辞典』p.159

５）財務省主計局「『国の財務書類』ガイドブック」平成31年１月，https://www.mof.go.jp/budget/report/public_finance_fact_sheet/fy2017/guidebook.pdf（以下、「『国の財務書類』ガイドブック」）p.1および（注２）

６）『国の財務書類』ガイドブック，pp.1-3、財務書類整備の経緯は、同資料の図１を参考にして頂きたい。

７）『国の財務書類』ガイドブック，p.5、公会計については次の資料を参考にした。大橋英五『経営分析』大月書店，2005年10月、亀井孝文『明治国づくりのなかの公会計』白桃書房，2006年、公会計改革研究会『公会計改革～ディスクロージャーが「見える行政」をつくる～』日本経済新聞出版社，2008年、吉田寛『公会計の理論～税をコントロールする公会計～増補改訂版』東洋経済新報社，2009年、稲沢克『公会計新訂版』同文舘出版，2009年、石崎忠司・黒川保美『公共性志向の会計学』中央経済社，2009年、小西砂千夫『公会計改革の財政学』日本評論社，2012年、大住荘四郎「バランスシートからみた国の債務：財務書類をどう活用するか」（特集日本国債のゆくえ）『経済セミナー』（674），51-58，2013-10，日本評論社、宮澤正泰『公会計が自治体を変える！～バランスシートで健康チェック！～』第一法規，2014年、トーマ

ツパブリックセクターインダストリーグループ『一番やさしい公会計の本　第１次改訂版』学陽書房，2015年、馬場英朗・大川裕介・林伸一『入門公会計のしくみ』中央経済社，2016年、東　信男『政府公会計の理論と実務～国の予算・決算制度，財産管理，政策評価及び国際公会計基準への対応～』白桃書房，2016年、柴健次『公共経営の変容と会計学の機能』同文舘出版，2016年、宮澤正泰『公会計が自治体を変える！＜Part2＞単式簿記から複式簿記へ』第一法規，2016年、宮澤正泰『公会計が自治体を変える！＜Part3＞財務データの分析は行政改革の突破口』第一法規，2018年

８）『国の財務書類』ガイドブック，p.3，下線は拙者

９）『国の財務書類』ガイドブック，p.7，下線は拙者

10）『国の財務書類』ガイドブック，p.36

11）『国の財務書類』ガイドブック，p.37，下線は拙者

12）HP『法人企業統計調査』Q&A

13）企業会計基準委員会「企業会計基準第10号　金融商品に関する会計基準」最終改正2019年７月４日、https://www.asb.or.jp/jp/wp-content/uploads/20190704_05.pdf（以下、「企業会計基準第10号　金融商品に関する会計基準」）pp.5-6，Ⅱ.金融資産及び金融負債の範囲等１．金融資産及び金融負債の範囲４．

14）『国の財務書類』ガイドブック，p.10，３．「国の財務書類」の特徴　～企業会計との違いを中心に～（１）貸借対照表①現金・預金の取扱い

15）財務省「平成29年度『国の財務書類』の骨子」https://www.mof.go.jp/budget/report/public_finance_fact_sheet/fy2017/fy2017kossi.pdf（以下、「『国の財務書類』の骨子」）p.4，

16）『国の財務書類』ガイドブック，p.3.「国の財務書類」の特徴～企業会計との違いを中心に～（１）貸借対照表③貸付金の取扱い，pp.13-14，下線は拙者

17）『国の財務書類』ガイドブック，p.2. 財務状況の説明（対前年度比較）（１）ストック（資産・負債）状況について，主な増減要因等について，３．「国の財務書類」の特徴～企業会計との違いを中心に～（１）貸借対照表③貸付金の取扱い，p.3

18）『国の財務書類』の骨子，p.4「資産の説明」

19）財務省「平成29年度『国の財務書類』のポイント」https://www.mof.go.jp/budget/report/public_finance_fact_sheet/fy2017/fy2017point.pdf（以下、「『国の財務書類』のポイント」）p.28「主な増減要因等について『連結貸借対照表』＜資産の部＞」

20）『国の財務書類』のポイント，p.3，２.財務状況の説明（対前年度比較）（２）フロー（費用・財源）状況について

21）『国の財務書類』の骨子，p.7，２.連結財務書類について（３）ストックの状況（資産）（平成29年度末）

22）『国の財務書類』ガイドブック，p.19

23）『国の財務書類』の骨子，p.8，

24）企業会計基準第10号　金融商品に関する会計基準，pp.5-6，Ⅱ．金融資産及び金融負債の範囲等１．金融資産及び金融負債の範囲５．

25）『国の財務書類』のポイント，p.3，２．財務状況の説明（対前年度比較）（１）ストック（資産・負債）状況について，負債

26）『国の財務書類』ガイドブック，p.3，下線は拙者

27）『国の財務書類』ガイドブック，p.27

28）『国の財務書類』ガイドブック，p.3

29）『会計学中辞典』p.341

30）黒木淳『公会計テキスト』中央経済社，p.73